

穏やかな改革 — プレイバックシアターによる和解修復の試み

宗像佳代

劇団プレイバックーズ

1. はじめに

国際セミナー「南京を思い起こす 2011」は、2011年10月5日から8日にかけて南京師範大学にて実施された。そしてアルマンド・ボルカス氏がファシリテーターをするワークショップ、Healing the Wounds of History (歴史の傷を癒す)の一部として、プレイバックシアターが導入された。

中国からフレンズプレイバックシアター、香港からエディ・ユウ、そして日本からは劇団プレイバックーズが参加し、その混合チームがプレイバックシアターを上演した。ここでは、4日間で語られた7本のストーリーを振り返り、プレイバックシアターがめざす心の和解の可能性を考える。

2. プレイバックシアターとは

昔話や童話がその奥に深い意味やメッセージをもって人生の真実や生きる知恵を伝えてきたように、プレイバックシアターはストーリーを通して、現代に生きる私たちを教育する。

プレイバックシアターはある個人的な体験を、その場で即興劇として再現する手法である。「個人的な体験を大勢の人が観る」という形式で、ある時に抱いた感情、新しい視点、未来へのイメージなどを参加者同士が伝えあう。そこで語られるストーリーは個人的なものでありながら、不思議と私たちの背景にある社会の状況や構図を映し出す。人と人とが深いレベルでかかわり、人間としての真実を共有する。その結果、ある種の「社会教育」が成し遂げられる。

3. 織りなす綾 — ストーリーの深層

観客が日常の考えるモードから感じるモードに移行しているとき、プレイバックシアター特有の深い交流が始まる。語られたストーリーの深層を分析するとストーリーが「人類の英知」や「普遍的真実」を含んでいることがわかる。

今回は、ワークショップ中に3本のストーリーが語られた。そして、夜の公開パフォーマンスで、さらに4本のストーリーが語られた。これらのストーリーは、それぞれが独立した個人的な体験として語られていながら、全7章から成り立つ大きな一つの物語

となった。7本のストーリーが織りなした綾は、中国と日本の若者が加害者と被害者の子孫として抱く気持ちを認め合い、心から平和を望む関係に至るまでの変容の様子を描いた。以下は、語られたストーリーの概略、それぞれのストーリーの意味、そして、ストーリーのなかで紡がれたメッセージの糸である。

～ワークショップにて～

「千人からの攻撃」 日本人教師

中国と日本、その過去の歴史について、私は知っているつもりだった。だが数十年前に中国人の集会に参加したとき、その知識がいかに表面的なものだったのか思い知った。約1千人の怒りと悲しみの声をあげる中国人の集まる会場の中に、私はただ一人の日本人としてそこにいた。彼らが叫ぶ中国語は理解できなかったが、怒りのエネルギーに直撃された。言葉もなく、たった一人、うちのめされていた。

このストーリーで、中国と日本は、相いれない関係にある。対話は成り立たず、相手とつながろうとする気持ちもない。ここでは、たった一人の日本人が多数の中国人から言語による暴力を受けている。加害者であったはずの日本人がこの場では被害者であり、被害者であったはずの中国人が加害者になるという立場の転換が見られる。

大きな物語の第一章として、テラーはもちろん、誰しものが無意識レベルではあるが、問題提起がなされたと思われる。加害者であったはずの日本人がこの場では被害者であり、被害者であったはずの中国人が加害者になるという立場の転換が見られる。「誰が被害者であり、誰が加害者なのか。その真実は、どこにあるのか。被害も加害も併せ持ち、矛盾にみちた複雑な存在が人間なのではないか。過去の歴史教育は客観的事実の伝承にとどまり、史実を聞くことで抱くことになった怒りや憎しみの感情は放置されたままである。そこにあって、今、私たちは平和を望めるのか。感情レベルでの和解は成立するか。」この命題を巡って、以下6本のストーリーが水面下で対話する。そして、最後のストーリーにこの命題の最終的な答えがくることになった。以下、それぞれにストーリーの深層が提示しているのであろう仮説を紹介する。

「優しい祖父と悪魔の日本兵」 日本人学生

とても優しい祖父だった。私をことのほか可愛がってくれる人だった。幼い頃から抱

く祖父へのイメージは、「優しいおじいちゃん」でしかなかった。長じて、祖父が高い位置として中国で従軍していたことを知った。ということは、非道な行いをした日本兵の1人だったということなのか。真実はわからないが、彼も悪魔のような日本兵だったのか。孫からみた祖父のイメージと日本兵としての祖父のイメージが乖離している。対極にある祖父の二つのイメージがせめぎ合い、私を苦しめる。

ここで語られた「祖父のイメージ」が代弁しているのは、人間という生き物の複雑さである。テラー（語り手）は「優しかったおじいちゃん」が「悪魔のような日本兵」でもありうるという事実を受け入れられない。二つの異質なイメージは、善悪の対極にあり、祖父への思いが混乱していた。

第一話で提示された命題に対する返答のように語られたストーリーである。人間を加害者と被害者とに分類したり、単純に区別したりすることはできない。たとえ相反するものがあったとしても、いずれもが真実である。私たちはそんな矛盾を受け入れて、その葛藤を乗り越えていく、という人生の普遍的真実が語られた。

「それでも明るかった祖母」 中国人学生

中学生のころに祖母とゆっくり話をした場面を今、思い出している。祖母は自分の父親を日本兵に殺され、困難に満ちた人生をやっとの思いで生き抜いた人である。祖母の心の中にある傷跡や身体に埋め込まれた悲しい記憶は、消えるはずがない。にもかかわらず中学生の私を前にして、祖母の笑顔はひたすら楽天的だった。祖母のイメージは、明るい人、なのである。そんな祖母を私は尊敬してやまない。

大きく重い過去の歴史につぶされることなく、人間本来の生命力に満ち、力強く生き抜いていった女性のストーリーだった。たとえ、どんなに不幸でも、悲惨な人生にあっても、めげずくじけず、生きる喜びを見出した祖母を慕うストーリーであった。

一本目、二本目と人間の暗い部分、否定的な姿を含むストーリーが語られたあと、まるでバランスをとるかのように、強く、明るい側面がアピールされた。この祖母のように苦闘を経ても希望を忘れず、明るく生きた人もいる。人間という動物は究極の不幸にみまわれたあとでさえ、たくましく、生きていける存在なのだ。そういう意味で、このストーリーもまた人間が「複雑な存在」であるというテーマを引き継いでいる。全体の物語の展開としては「困難な体験が必ずしも暗い未来につながるわけではない」という希望を暗示するメッセージが表出してきた。

～パフォーマンスにて～

一般公開のパフォーマンスとなって、会場の景色が変わった。ワークショップ参加者に加えて外部からの観客を迎えてのプレイバックシアターになった。ワークショップで語られた3本は、戦中、戦後に生きた人たちが話題の中心となっていた。空気が変わり、新たな視点が持ち込まれる。時が進み、時代が変わったことを意味するかのように話題の中心が若者へと変化することになった。

「今なればこそ」 日本人学生

私には韓国人の恋人がいる。韓国に留学していたとき、二人で両国の歴史について話をした。そのとき、彼を前にして、私は自分が日本人であることを強く意識した。かつて韓国を支配していた日本人、かつて加害者だった日本人。そして、私は紛れもなくその子孫。私たち二人は、支配・被支配という関係が終わった今だからこそ、国境を越えて、つきあえる。1人の人間と、もう1人の人間として、尊重しあえる。もし、この出会いが70年前だったら、どうなっていたことだろう。

若い世代からの視点が持ち込まれている。以前は、日本が韓国を支配するという社会的構図を乗り越えて、情緒的な人間関係が成立することはなかった。70年という歳月が過ぎ、この時代にある若者は心一つにできているというストーリーだった。

ここでは加害者と被害者というテーマが支配・被支配というカタチとして表れている。物語は次の章に進み、対立していた国と国の若者が、心一つにした。戦争が終わり、時が流れ、若い世代は過去とは異なる関係を作っているという真実が提示されている。はたして、対立する中国と日本も同じように和解できるのだろうかと問われているようである。

「それぞれの事情」 日本人学生

祖父から聞いていたのは、捕虜としての悲惨な体験である。ソ連に抑留されて過酷な労働を強いられた祖父は私からすれば被害者そのものだった。そんなことから、日本人としての自分を加害者側に置くことはなかった。ところが、南京について学んでみると、日本は加害者でもあったことを知った。ここにきて私は混乱と葛藤のさなかにあった。そんな私に、中国の人が「被害者も加害者も、それぞれに、いろいろな事情があるものだ」と語りかけてくれた。大きな気づきだった。

さらに加害者と被害者のテーマが続く。ソ連で被害者だった祖父が中国では加害者であったとしたら、という混乱である。ソ連での被害者体験も、中国での加害者体験も、

いずれも想像を絶する人間の行動である。互いへの憎しみが渦まく究極の状況では、誰でも、あの祖父でさえ、残虐な加害者になりうるのか。そんな葛藤のさなかにある日本人学生を助けたのは中国の学生だった。

このストーリーでは、加害者と被害者について提示された当初の命題への答えがテラーの気づきとして語られる。「いろいろな事情があるのだ」という言葉を聞いて、テラーの心の暗闇に一筋の明かりがさしこんだ。悩める日本人学生を救ったのは、中国の学生だった。全体の物語としては、一歩先へと進む。矛盾や葛藤が和らぎ、癒されている。そして、中国と日本は、敵対する関係から相手を気遣う関係に変容している。

「互いの真実」 中国人学生

現在、留学中の日本で中国人として差別されることはあまりない。日本に行く前に抱いていたイメージに反して、である。ただ、不愉快なことに、バイト先の年配の人たちは中国に対して差別的な発言をする。一方、中国に戻ってきたら、中国人から日本の悪口を耳にする。彼らが誤解しているときには、「それは違う」と日本のために発言する。どっちもどっちで、お互いのことをよくわかってない。私は中国であれ日本であれ、どちら側に居ても辛い。互いに相手の真実をもっと知りあえば、この葛藤を避けられるのに。

対立、矛盾の真ただ中において、その葛藤に正面から立ち向かう若者のストーリーであった。対立があっても諦めない。誤解があつたら、正そうとする。困難な状況にあつても、お互いを深く理解していこうと訴えている。

一本前のストーリーで差し込んだ希望の灯りがこのストーリーでは、より鮮明に、より強く、輝くことになった。全体の物語の進展としては、事実をつまびらかにし、相手の真実を知ることが和解を実現していくプロセスだとの示唆がある

「一つの未来」 中国人学生

祖母から日本軍の工場で過酷な労働をしていたときの話を聞いていた。だから日本人は悪い人、と思いこんでいた。しかし、ふと気がつくと、炊飯器やカメラなど日本の製品を重宝に使っている。先日の震災のおりには、日本人のために悲しみを感じ、日本人の我慢強さに触れて感動した。日本にもいいところがあるのだ。しかし、そう思ったとたん、中国を裏切っているのではないかと不安になる。そんな矛盾を抱えてきた。そして、今日、ここで、対立する2つが1つになるという実感を得た。固く相反するところから柔らかく溶け合うところへ。私は、狭い民族主義にとらわれず、真実を見極めたい。

命を大切にしたいし、未来を平和にしたい。今、静かな気持ちになれた。

日本の残虐行為が語り継がれ、それを聞かされた若い世代は日本への憎しみを抱いている。それと同時に若い彼らは中国と日本の経済的な協力関係の恩恵を受けている。心に抱えてきた憎しみや怒りと日本経済に感謝する気持ちが共存できるのか。ここまでは個人の人間性は清濁併せ持つというストーリーが語られていたが、このストーリーでは、視点が広がった。日々の生活のなかにも、社会情勢のなかにも、矛盾や葛藤は存在するというストーリーだった。そして、HWHのプログラムを体験して、テラーは自らその混沌から抜け出した。

物語の最終章として、冒頭に浮上していた命題の答えが提示された。平和を望む気持ちは、憎しみや葛藤を溶かすこともできるというコメントである。関係性や感じ方の変容が起こっていることに加えて、個人的成長の面でも変容している。つまり、直前のテラーは他人の言葉で救われているが、このテラーは自らがワークショップ中に気づくことで心の平和を取り戻した。「狭い民族主義にとらわれたくない」という言葉を口にし、静かな気持ちになれたと語った。矛盾や葛藤は世の常であるという普遍的真実を受容できるようになった。テラーたちも、観客も7本のストーリーに深く秘められた対話を理解してないであろう。ただ、あの場に居合わせた若者たちの何人かは成長し、葛藤を統合し、安らかな気持ちを手に入れたのである。

4. 和解のためのツールとして

プレイバックシアターは、声高に何かを教訓する場ではない。今回のプレイバックシアターも、平和や和解を直接的に訴える場ではなかった。心を開くように強要したわけでもなく、勇気を出して相手と対峙することを求めたわけでもない。その状況で、参加者は7本のストーリーを共有し、テラーが中国人であれ、日本人であれ共感の涙を流した。誰かのストーリーを見ることは、その人の立場や境遇が自分とは異なっていたとしても、自分の心がむこう側に移動し、他者の痛みや悲哀をわがことのように感じる機会を得ることになる。今回も、ストーリーの深層を読み取れば、対立する心と心の間には橋がかかり、矛盾と葛藤を乗り越えて、互いの心が寄り添っているようだった。

プレイバックシアターという手法が和解を促すのは、なぜか。その理由の一つは、何が起こったかという「事実」を語り合うことより、人々がどんな気持ちになったかという「感情」に焦点をあてるからである。史実に関しては同意できない相手だとしても、その相手の心の景色を目の当たりにするとき、心は相手の側へと傾く。事柄について異論があったとしても、相手の痛みや痛みを感じとることはできる。向こう側とこちら

側という二元的な構図から抜け出すことができれば、人間としてのヒューマンな出会いが促される。政治的、社会的な和解に手が届かないとしても、インフォーマルな個別の和解が起こりうるのである。

政治、歴史の教科書、マスメディアに記される史実は、「公式のストーリー」である。何が、いつ、どこで起こったかという事実を伝えるものである。プレイバックシアターでは、同じ事実を個人の視点から切り取って「非公式のストーリー」として社会に伝承する。テラーの言葉だけでなく、表情、語り口、涙など、すべてを含むものが「非公式のストーリー」である。今回語られた7本の「非公式のストーリー」とそれを語った7人のテラーの姿は、いつまでも参加者の心に残り、色あせることはないだろう。あのストーリーの記憶が、私たちを和解に導く灯りとなることを切に願う。

5. おわりに

この共同研究を続けてこられた、張連紅さん、村本邦子さん、アルマンド・ボルカスさん、笠井綾さんなど多くの先輩たちに心からの敬意と感謝の念を表します。日英中という3つの言語がとびかう現場で通訳して下さった皆さまのお骨おりには頭がさがるばかりです。共にステージを務めたフレンズプレイバックシアターの方々、プレイバックシアターのコ・リーダーとなったエディ・ユーさん、劇団プレイバックーズの仲間である佐藤久美子と丹下一、あなたたちとのチームワークによって、プレイバックシアターを上演することができました。

最後に、そして最も、感謝の気持ちが募るのは、あの場を共有した参加者の皆さん、なかでも、7人のテラーの方々です。プレイバックシアターが平和のツールになることをこれまで以上に私は確信しました。これからも、ストーリーが語られ、私たちと私たちの子孫のために、優しく穏やかな改革がすすむことを願ってやみません。

参考文献

宗像佳代(2006)「プレイバックシアター入門」明石書店

笠井綾(2007)「こころとからだで考える歴史：HIROSHIMA STORIES コミュニティワークの自己治癒力」『新しい芸術療法の流れ クリエイティブアーツセラピー』関則雄編、フィルムアート社

Fox, Jonathan(1994) Acts of Service: Tusitala Publishing

Salas, Jo(1993) Improvising Real Life: Personal Story in Playback Theatre:Tusitala Publishing